Doctor's eye Special ドクターズアイ スペシャル

糖尿病の地域医療連携

Community Medicine 【 宮城県栗原市 】

栗原中央病院の糖尿病チームの皆さん
前列左から栄養管理室長・伊藤義博先生、内科部長・鈴木慎二先生、同・木田真美先生

高齢化する糖尿病患者へチーム医療で対応 地域全体の診療レベル向上を目指す

栗原中央病院は、宮城県の県北地域で唯一の日本糖尿病学会認定教育施設です。
糖尿病患者の高齢化が急速に進む中で、
チーム医療で療養指導に取り組んでいる同院を取材しました。

2005年4月、宮城県北西部の10町村が合併し、県内で最も広大な面積を有する栗原市が誕生しました。これに先立って共同で設立されたのが、栗原中央病院です。その後、市立となり、現在は広域な市内の中核病院として、地域住民の健康を支えています。さらに、宮城県北部地域における唯一の日本糖尿病学会認定教育施設として、専門性の高い糖尿病診療を提供し、糖尿病臨床に関する様々なスキルの向上に努めています。

また、地域の糖尿病診療における技術の向上を目指し、2013年に「宮城県県北CDEの会」を立ち上げました。近隣の登米市・気仙沼市からも、糖尿病療養指導士（CDE）の資格を持ったスタッフが多数参加し、高齢者糖尿病、フットケアなど多様なテーマで研究会を開催しています。同院の内科部長である鈴木慎二先生によれば、仙台市などの都市部と比べると、農村地域を抱える栗原市では明らかに高齢化が加速しており、7万人を数える人口のうち、すでに3人に1人以上が高齢者です。

西村智浩＝撮影　大岳美帆＝取材・文

宮城県栗原市の糖尿病地域医療連携

栗原中央病院には、日本糖尿病学会専門医が2名、後期研修医が2名在籍しています。また、糖尿病療養指導士も5名在籍しており、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士それぞれの立場から患者さんの療養指導を支援しています。

栗原中央病院では、かかりつけ医からの紹介には必ず返戻・逆紹介という形で応え、相互連携を構築しています。教育入院や慢性合併症、急性増悪期の治療は同院が、症状や血糖コントロールが安定しない時点ではかかりつけ医が担うという形をとっています。

かかりつけ医
- 安定期治療

かかりつけ歯科医
- 歯周病治療
- 定期検査
- 口腔内ケア指導

糖尿病患者
（糖尿病連携手帳を活用）

基幹病院
（栗原中央病院）
- 内科（教育入院から急性期治療、合併症予防、慢性合併症の治療など）
- 眼科、外科、皮膚科、整形外科の治療

ソーシャルワーカーによるサポート
院内・行政のソーシャルワーカー

メディカルスタッフによる療養指導
看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士など

STAFF'S VOICE

内科病棟看護師
鈴木裕香さん
テーラーメイドの教育入院を実施し、フットケア、口腔ケアにも力を注いでいます。

内科外来看護師
蘇武文枝さん
外来でインスリン導入した患者には、数日後に、電話でその後の状況確認をしています。

整形外科外来看護師
小林久美さん
蜂窩織炎（ほうかしき）や足壊疽の患者と接するため糖尿病も勉強し、内科との連携を推進中です。

理学療法士
太田浩貴さん
糖尿病教室で運動療法について説明し、手軽にできるストレッチや有酸素運動を広めています。

薬剤師
大内可成子さん
インスリンやGLP-1の導入指導の他、薬剤指導の勉強会を通して、地域診療の向上に貢献します。

DATA

栗原中央病院
〒987-2205
宮城県栗原市築館宮野中央3-1-1
TEL：0228-21-5330
URL：http://www.kurihara-central-hp.jp/

［診療科目］
内科・外科・整形外科・産婦人科・眼科・耳鼻咽喉科・小児科・皮膚科・麻酔科・精神科・泌尿器科・放射線科・リハビリテーション科

大正富山医薬品株式会社　発行：株式会社ジャパン ライフ デザイン システムズ　CODE：64913

DOCTOR'S VOICE

患者一人ひとりの生活に合った テーラーメイド治療を推進します

鈴木慎二先生 Shinji Suzuki

栗原中央病院 内科部長

1996年自治医科大学医学部卒業後、国立仙台病院（現仙台医療センター）内科研修。自治医大義務として、丸森病院、志津川病院、加美病院に勤務。2001年、仙台厚生病院糖尿病代謝科にて後期研修。05年東北大学糖尿病代謝科入局、分子代謝病態学分野大学院入学。09年山形市立病院糖尿病・内分泌内科勤務、11年より現職。

以前、栗原中央病院に通院している糖尿病外来患者の平均年齢を調べたところ、70歳を超えていました。高齢化に加え、農村地域の肥満率の高さが気がかりでした。全国的に見ても宮城県はメタボの比率が高いと聞きましたが、その比率を上げているのが農村地域の習慣」だと、鈴木慎二先生は指摘します。

農作業などの合間の10時と午後3時にひと息入れ、お茶や、糖分の多い健康飲料とともに、あんパンや菓子類などのお茶うけを必ず口にする習慣。その間食のカロリーはかなりのものです。田植えや稲刈りがある農繁期には重労働になるものの、通年というわけではないので、間食によるカロリー過多が続き、肥満をもたらしているというのです。こうした生活習慣への注意喚起や高齢患者への的確なアプローチには、医師だけでなく、専門知識をもったメディカルスタッフによる一丸となった指導が不可欠です。

栗原中央病院では糖尿病療養指導士の資格を持った看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士のほか、糖尿病網膜症への対応として眼科が、足壊疽（えそ）への対応として外科・皮膚科・整形外科が関わり、さらにソーシャルワーカーも診療チームに加えています。

例えば、経済的な理由で治療を中断してしまった患者や身寄りのない高齢患者さんには、院内のソーシャルワーカーが生活の相談にのり、最低限の治療が受けられる環境を提供できるよう、重層的に患者さんを支えていきます。糖尿病診療チームの中にソーシャルワーカーを巻き込むというのは、優良な取り組み事例の1つだと言えそうです。

教育入院時に配付されるパンフレットの数々。糖尿病教室、患者教育用DVDと併せて療養指導に役立てている。地域病診連携、歯科医院との連携にも糖尿病連携手帳を利用している。

糖尿病は〝全身病〟なのです

「糖尿病の進行は、生活習慣の違いによっても個人差が大きいので、その人に合ったテーラーメイドの治療が必要です」。

そう語るのは、同じく内科部長で糖尿病専門医の木田真美先生。日本肝臓学会の専門医でもある木田先生は、肝臓と糖尿病の関係にも言及しました。

「糖尿病患者には脂肪肝やNASH（ナッシュ／飲酒しない人の脂肪肝から発症する肝炎）も多い。肝臓に脂肪がつくと肝機能が低下するだけでなく、インスリンへの抵抗性が出てきてしまうからです」。その改善には食事療法や体重管理だけでなく、糖尿病の治療も必要となります。

「糖尿病の合併症に血管障害がありますが、血管は全身をくまなく流れているのだから、体のどの部位で障害が引き起こされてもおかしくない。糖尿病は全身に障害を与える〝全身病〟だという認識が重要です」と木田先生。

糖尿病は、合併症を発症する手前で、いかに抑えるかが肝心なため、そういった啓発の機会として、毎週開講している糖尿病教室には力を入れています。

木田真美先生 Mami Kida

栗原中央病院 内科部長

1995年山形大学医学部卒業。東北大学消化器病態学講座入局、97年まで厚生年金病院勤務、その後、総合水沢病院勤務、東北大学大学院入学を経て、2009年より栗原中央病院勤務、現在に至る。

患者会ではイベント中の栄養管理も徹底します

栗原中央病院では2013年11月に「薬師の会」と名付けられた患者の会を発足し、温泉旅行など各種イベントを実施してきました。イベントの開催中も糖尿病教室さながらに、血糖を管理する食べ方や運動療法が学べます。食事指導を行っている栄養管理室長の伊藤義博先生が、同病院の工夫を話してくださいました。

「メロンパン1個（400～500kcal）と、それと同じカロリーのお膳のフードモデルを患者さんに見せます。どっちを選ぶか、選ぶべきか、言わずもがな、ですよね。こうした自覚が大切なのです」。

食事療法においても地域診療に貢献するために、かかりつけ医からの依頼に応じて、外来栄養指導も実施しています。高齢患者対応や肥満対策、円滑な連携体制の構築など、課題はありますが、日ごろ、鈴木先生のおっしゃる「顔の見える地域連携」を目指して取り組みを進めています。

伊藤義博先生
Yoshihiro Ito

栗原中央病院 栄養管理室長

1980年東北栄養専門学校卒業。管理栄養士。同年国立療養所秋田病院に勤務、その後、岩手病院、弘前病院、鳴子病院等を経て、2005年栗原中央病院に移り現在に至る。

患者の会で出されるメニューは伊藤先生が考案する。これで600kcal。メロンパン1個半程度のカロリーとなる。